

# 手古宮塚・上原遺跡

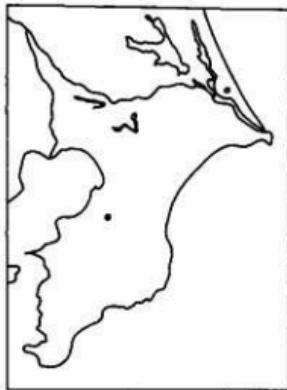
—(二) 養老川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財報告書—

1 9 9 3

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

# てこみやづかうえはらいせき 手 古 宮 塚・上 原 遺 跡

- (二) 養老川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財報告書 -



1 9 9 3

千葉県土木部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

東京湾に流入する養老川は、県内有数の河川であり、この流域には先土器時代から数多くの遺跡が残されており、とりわけ台地上に展開する遺跡群は県内でも最大規模を誇ることが知られています。

一方、養老川は県内有数の多雨地域である清澄山系に源を発し、中・下流域では蛇行を繰り返し、この地域の沖積平野の人々の暮らしは、まさに水との戦いであったこともうかがえます。

このため、古来より河川災害から守るためのいろいろな努力がなされてきましたがその代表的なものとして、昭和46年の河川改修事業があげられます。それにもかかわらずふたたび平成元年7月に大きな被害に見舞われたことにより、新たに災害復旧事業が認められ、千葉県養老川・村田川改修事務所が設置されて本格的な河川改修事業が行われることになりました。そこで千葉県教育委員会では、この河川改修事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県養老川・村田川改修事務所をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねてきましたが、どうしても現況の変更を避けられない部分について、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが担当することになり、平成3年11月1日から2か月間にわたって調査を実施しましたが、この結果を報告書として刊行するはこびとなりました。

本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護と普及のために広く一般の方々に活用されることを願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで御指導いただいた千葉県養老川・村田川改修事務所、千葉県土木部河川課、千葉県教育委員会、市原市教育委員会をはじめ、地元関係諸機関各位の御協力にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 千葉県文化財センター  
理 事 長 奥 山 浩

## 凡　　例

1. 本書は、千葉県市原市二日市場手古宮字欠の上627-1他に所在した手古宮塚と、市原市上原字上井戸234他に所在した上原遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは手古宮塚が219-060、上原遺跡が219-061である。
2. この調査は養老川河川災害復旧助成事業に伴う事前事業として、千葉県教育委員会の指導のもとに千葉県養老川・村田川改修事務所との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成3年11月1日から12月24日まで実施した。調査は技師福田誠が担当した。
4. 整理作業は平成4年1月4日から1月31日まで実施した。作業は福田誠が担当した。
5. 本書は調査部長天野努、調査部長補佐阪田正一、班長深澤克友の指導のもとに、福田誠が編集した。
6. 本書の作成にあたっては、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、千葉県養老川・村田川改修事務所の関係各位をはじめ多くの方々の御指導と御協力を得た。ここに深く感謝の意を表します。

# 本文目次

## 序 文

## 凡 例

## 目 次

### I 序 章

1 調査にいたる経緯 .....	1
2 手古宮塚と上原遺跡の立地と周辺の遺跡について .....	1
3 調査の概要 .....	3

### II 手古宮塚A

1 造構 .....	4
2 遺物 .....	7

### III 手古宮塚B

1 造構 .....	9
2 遺物 .....	12

### IV 上原遺跡

1 造構と遺物 .....	13
---------------	----

### V まとめ

1 手古宮塚周辺の景観のうつりかわり .....	17
2 上原遺跡周辺の地形について .....	17

## 挿図・表目次

第1図 手古宮塚・上原遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 手古宮塚周辺地形図	5
第3図 手古宮塚A現況実測図	6
第4図 手古宮塚A土層断面図	7
第5図 手古宮塚A古鏡拓本・石碑拓本実測図	8
第6図 手古宮塚B現況実測図	10
第7図 手古宮塚B土層断面図	11
第8図 手古宮塚B石碑拓本実測図	11
第9図 上原遺跡周辺地形図	13
第10図 上原遺跡調査トレンチ配置図	14
第11図 上原遺跡土層断面図	15
第12図 上原遺跡出土遺物実測図	16
第13図 上原遺跡周辺地形形成概念図	19
第14図 上原遺跡周辺ボーリング成果図	19
第1表 手古宮塚A石碑一覧表	4
第2表 手古宮塚B石碑一覧表	9

## 図版目次

- 図版1 手古宮塚遠景・手古宮塚A全景・石碑
- 図版2 手古宮塚A石配列状況・土層断面・下層土層断面
- 図版3 手古宮塚B全景・石碑・土層断面
- 図版4 上原遺跡遠景・土層断面
- 図版5 上原遺跡土層断面・手古宮塚眼下藤原式揚水車壠跡・浅間山崩落状況
- 図版6 手古宮塚A出土遺物・上原遺跡出土遺物

# I 序 章

## 1 調査にいたる経緯

養老川は、その源を県内多雨地域にあたる清澄山系に発し、中流域では蛇行、下流域では川底の浅い築堤河道を形成するためこれまでにたびたび出水し、周辺に被害をあたえてきた。平成元年7月31日から8月1日にかけての豪雨では中流の鶴舞雨量観測所で総雨量297mm（時間最大40mm）を記録して、水位が著しく上昇し堤防が決壊して、越水により国道297号、国道409号、小湊鉄道の主要交通機関をはじめ河川護岸、一般住居、農作物などに被害を生じた。このため、平成元年10～11月に国の災害査定を受け、同12月には災害復旧助成事業が認められ、平成2年4月には事業を実施するため養老川・村田川改修事務所が設置された。養老川について市原市権現堂地先の権現堂橋より市原市牛久地先の権現堂橋上流までの延長16,040mについて改修をすすめ河道の蛇行を改め、改修後の河道は延長13,700mに短縮されることになった。

このたび事業地内の埋蔵文化財について、千葉県教育委員会にその所在の照会があり、塚2基と包蔵地1か所が所在する旨の回答がなされた。その回答に基づいて千葉県土木部と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で遺跡の取扱いについて協議がなされた結果、事業の性格上計画の変更および現状保存は困難なため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議がととのった。

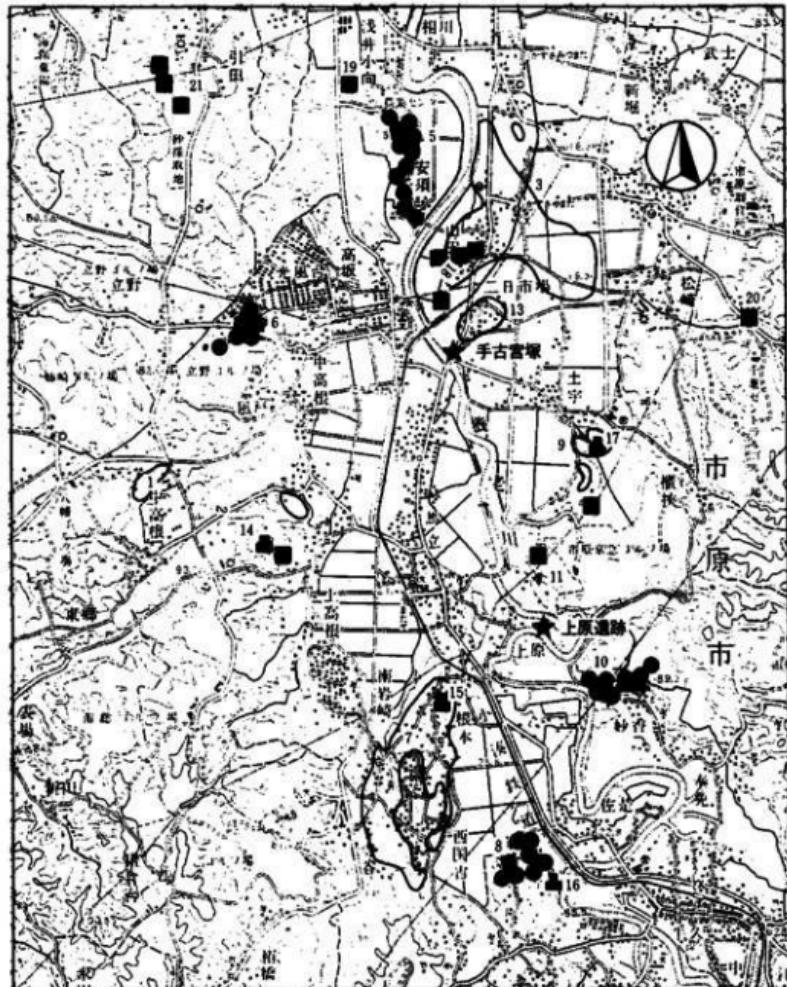
その結果、教育庁生涯学習部文化課の指示により、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定され、千葉県土木部と財団法人千葉県文化財センターとの間に調査委託契約が締結されて発掘調査を実施することになった。

発掘調査は手古宮塚を平成3年11月1日から12月24日、上原遺跡を12月3日から12月24日まで一部併行して実施した。整理作業は平成4年1月4日から31日まで実施し、報告書作成作業を終了した。

## 2 手古宮塚と上原遺跡の立地と周辺の遺跡について

市原市は房総半島のほぼ中央に位置している。養老川は清澄山系に源を発し蛇行を繰り返しながら市原市域を北に向かって流れ、全長75Kmの行程をたどって東京湾に注いでいる。上・中流域においては穿入蛇行と川廻し、下流域においては自由蛇行と川廻し・築堤河道などが特徴になっている。この川の両岸は自然環境に恵まれ、特に台地上は先土器時代から近世にかけて遺跡が多く所在する。

縄文時代の遺跡としては左岸台地上に草創期の南原遺跡（1）や、養老川最奥部の上高根貝塚（2）が知られている。弥生時代では山田大宮遺跡（3）、下原遺跡（4）などが知られて



- |            |           |            |               |
|------------|-----------|------------|---------------|
| 1. 南原遺跡    | 2. 上高根貝塚  | 3. 山田大宮遺跡  | 4. 下原遺跡       |
| 5. 安須古墳群   | 6. 中高根古墳群 | 7. 南岩崎古墳群  | 8. 佐是古墳群      |
| 9. 大城台古墳群  | 10. 妙香古墳群 | 11. 浅間山横穴群 | 12. 妙香堂部田山横穴群 |
| 13. 二日市場庵寺 | 14. 上高根城  | 15. 南岩崎砦跡  | 16. 佐是城跡      |
| 17. 大城砦跡   | 18. 山田塚群  | 19. 釜神古墳群  | 20. 松崎供養塚     |
| 21. 浅間山古墳群 |           |            | 12            |

第1図 手古宮塚・上原遺跡の位置と周辺の遺跡

おり、古墳時代では、左岸台地上に、安須古墳群（5）、中高根古墳群（6）、南岩崎古墳群（7）、佐是古墳群（8）などがあり、右岸には大城台古墳群（9）、妙香古墳群（10）、浅間山横穴群（11）、妙香堂部田山横穴群（12）がみられる。歴史時代では二日市場廃寺（13）、上高根城（14）、南岩崎砦（15）、佐是城跡（16）、右岸には大城砦跡（17）などが知られている。近世の塚としては山田塚群（18）、釜神古墳群（19）、松崎供養塚（20）、浅間山古墳群（21）などが知られている。

### 3 調査の概要

発掘調査は手古宮塚AおよびBについて平成3年11月1日から12月24日まで、上原遺跡について12月3日から24日まで一部併行して行った。

手古宮塚Aは、調査着手前に地主の方々と事業者により立ち木の伐採と石碑の片づけが終了していたので、ただちに調査前の風景を撮影して公共座標系のグリッドを設置した。調査地は交通の激しい国道297号線に近接しているので、調査の安全を確保するために調査区と道路の間に安全鋼板による屏を設置した。塚の現況の実測を行い、盛土の頂点を中心に東西、南北にトレントを設定し掘り下げ、断面観察と実測を行った。その後盛土を全部掘り下げた。この結果、盛土内から近世以降の陶磁器、土器および石製品、古鏡が出土し、さらに盛土の下から旧堤防を検出した。調査終了後、危険のないようにバックホウにより埋め戻し作業を行った。手古宮塚BについてもAと同様であるが、調査トレントの設定は現況の軸に沿って設定した。また、調査開始直後に近隣の方から昭和40年代に塚を移動したことを教示され、しかも、トレント下層から現代の硬貨が検出されたので、一部を除きバックホウで盛土の除去を行った。

上原遺跡は調査開始後に公共座標系のグリッドを設定し、確認調査トレントを設定して掘り下げたところ、表土内約50cm前後で遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。さらに約1m掘り下げても遺構や遺物は見つかなかった。北側のトレントの一部で、沖積層が削られた上に江戸時代宝永年間の富士テフラが堆積しているのを検出した。さらに一部のトレントをバックホウで掘り下げ土層の観察をしたが、これらのトレントは崩落が激しく写真撮影もできないほどだったため、概略図を記録した後ただちに埋め戻した。調査は確認調査をもって終了した。

## II 手古宮塚A

### I 遺構

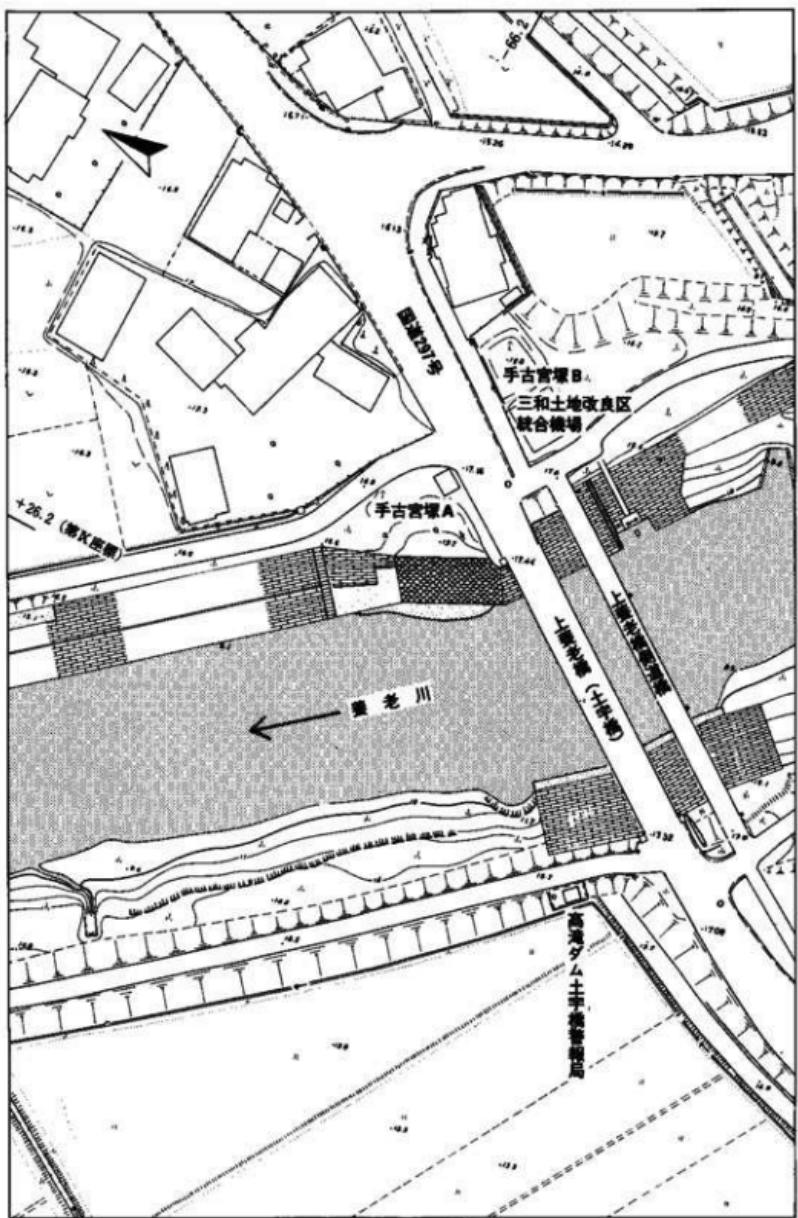
手古宮塚Aは、養老川中流右岸の堤防上に立地し、国道297号線（旧大多喜街道）の土字橋のたもとにあった。塚の調査前の状況は銀杏の大木がうっそうと茂る根元に地中に埋もれ、その脇の8基の石碑によってようやく塚であることがわかるような状況であった。東西長約6.0m、高さ約0.3mほどの精円の半球形で、北側と東側は、砂利道によって削られ、西側は養老川の護岸に向かってなだらかに下った後大きく一段下がり、ふたたびなだらかに下がっていた。南はなだらかに開けてテラス状になっていたが、さらに南はふたたび急激に上がつて、国道297号線の盛土につながっていた。一方、やや南西側には土字橋の下に降りるよう階段が作られていた。護岸工事、道路改良工事、橋梁工事のたびに空き地として利用され周辺を削り取られて小さくなってしまったという印象であった。

調査は、東西、南北方向にトレンチを入れ掘り下げて土層を観察したところ、現代の盛土、旧盛土、旧堤防および擾乱等の状況が明らかになった。基本的な土層は、最も深いところには黒灰色粘性土が堆積していた。赤褐色斑や暈管状斑紋を残し、かつて水田であったことを示していた。その上は白色粘性土と黒色あるいは黒褐色粘性土が薄く互層になっていた。この互層は非常に硬く締っており人力

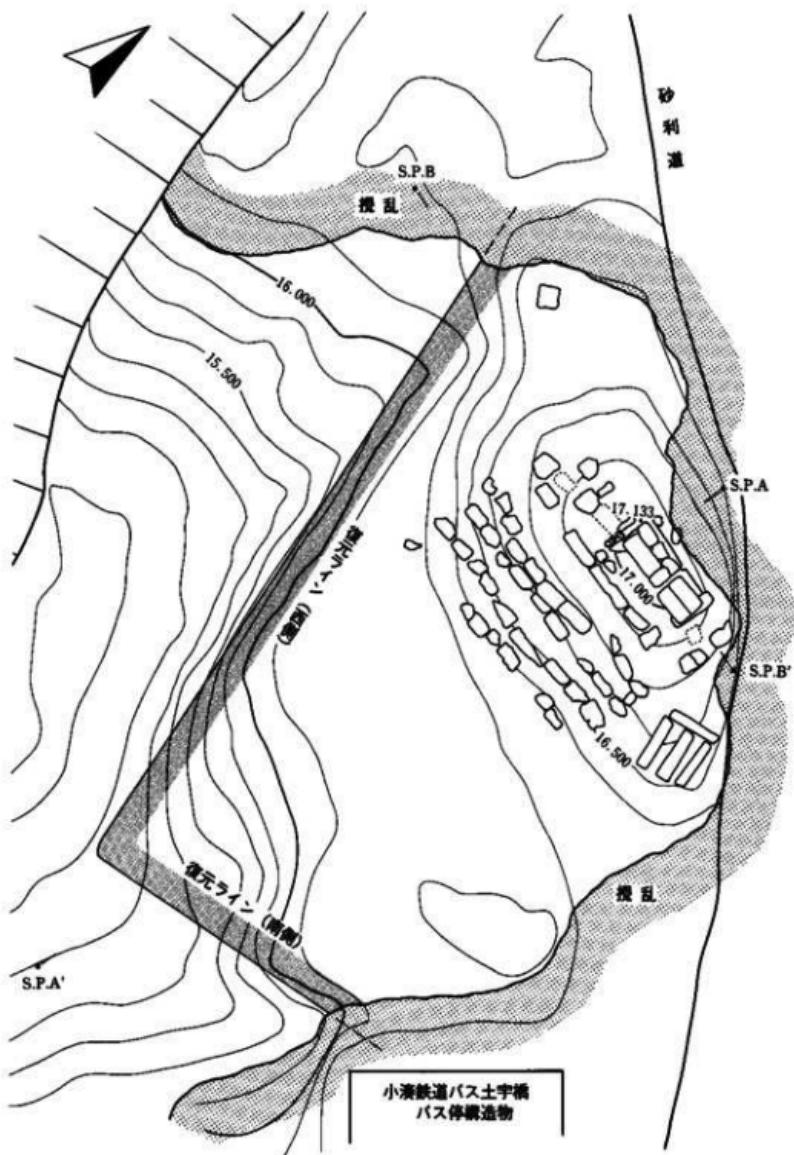
で突き崩すのが困難などであった。したがって版築された旧堤防と考えられた。この上には茶褐色砂質粘性土が堆積していたが、攪拌された赤褐色斑を多く含む。單一で厚く堆積しており、下の層と断続しているのでこれを最も古い盛土として考えた。また、攪拌された赤褐色斑を多く含むことから周辺の水田より土を集めてきたものと考えられた。その上にしまりのない川砂を多く含む層が3層ほど盛られ、そのうちの最も上の層

第1表 手古宮塚A 石碑一覧表

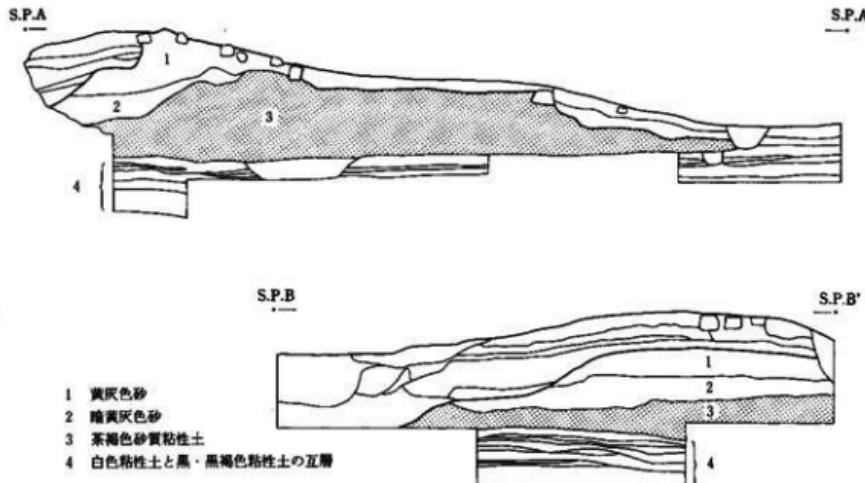
なし	なし	不明	明治二十年六月廿日	明治十五年九月二十七日	明治十五年九月二十七日	文政五年正月	享和三年三月	建物月日
自立型	角柱型	自立型	自立型	自立型	自立型	石碑	重圓型	形態
史山者	史山者	史山者	點被者	史山者	點被者	史山者	鐵灰者	石材
90 × 41 × 16	65 × 15 × 6	107 × 34 × 18	32 × 58 × 7	50 × 24 × 6	100 × 58 × 9	50 × 30 × 23	18 × 21 × 13	板×塊×塊行[4]
小天狗 大天狗 大天狗	角行等	富士吉田市立	生馬大伴	生馬大伴	富士吉田市立	富士吉田市立	水神宮	銘文



第2図 手古宮堰周辺地形図 (1/1,000)



第3図 手古宮櫻A 現況実測図 (1/100)



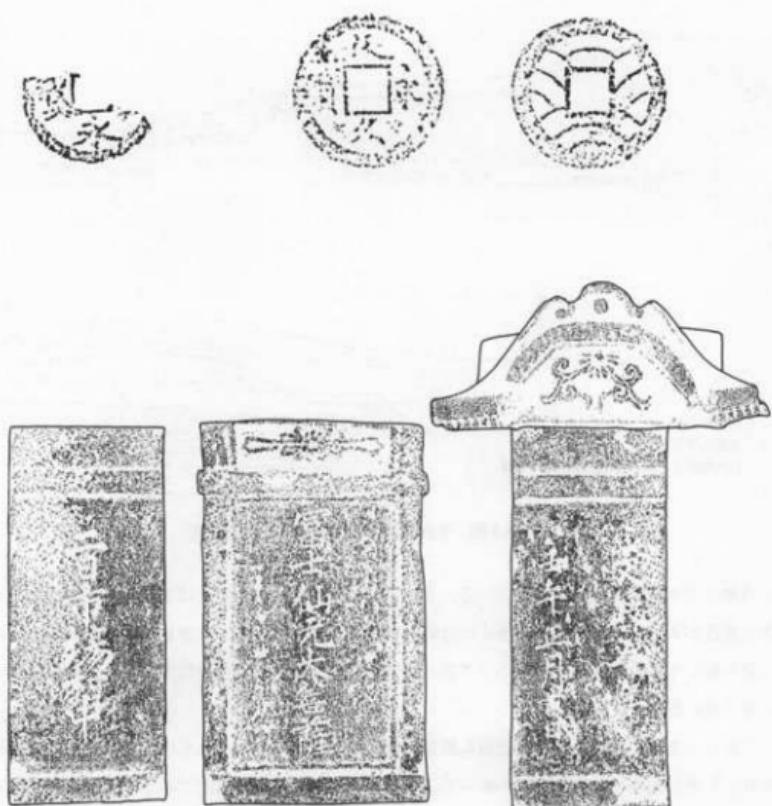
第4図 手古宮塚A 土層断面図 (1/100)

が円礫を含み塚の表面を形成している。これらの層を基本にして嵩上げ工事や砂利道による大きな擾乱が入っていた。擾乱の多くには碎石や鋸びたトタン板などを含むが、表面はならされ円礫を配してきれいにとりつくろってあった。石の多くは風化した砂岩であった。南斜面にのみ階段状に配されていた。

これらの土層の観察から、調査前に観察した西側の段が削平によるものでなく最も当時の形を残した塚の側面であることがわかった。その後盛土を除去する際にこのことを考慮して調査したところ、同じように南側にも側面が復元することができた。そのほかの部分については前述のとおり擾乱が激しく不明であった。スクリーントーンで示すように東西長12m以上、高さ1.7m以上の方形の大きな塚であったことがわかった。この塚の規模は地元の方々が「子供が上り下りして遊んだ大きな塚」であったとか「石が階段のようになって非常に高い塚であった」などの話とも一致するところである。たびかさなる嵩上げ工事によって塚が埋没したことわかった。

## 2 遺物

遺物は少なく、そのほとんどは、擾乱された表土内の遺物であり、4の層や旧堤防から出土したものは少ない。出土した古銭等については、第5図に示した。



第5図 手古宮塚A 古銭拓本（1/1）・石碑拓本実測図（1/8）

塚の上にあった石碑類は、調査前に片付けられていたが、第1表に示した。最も古いものは享和3年の水神宮である。次に古いのは文政5年正月のもので火山性の岩石を使った石祠であり、これがこの塚の富士浅間信仰に関連する最も古い石碑である。この石碑については拓本実測図を掲載した。いずれにしても、天保年間の川廻しの後に築盛されたと考えられる。小御岳大権現と刻まれた碑は造立年月日が不明だが、江戸時代のものと考えられる。

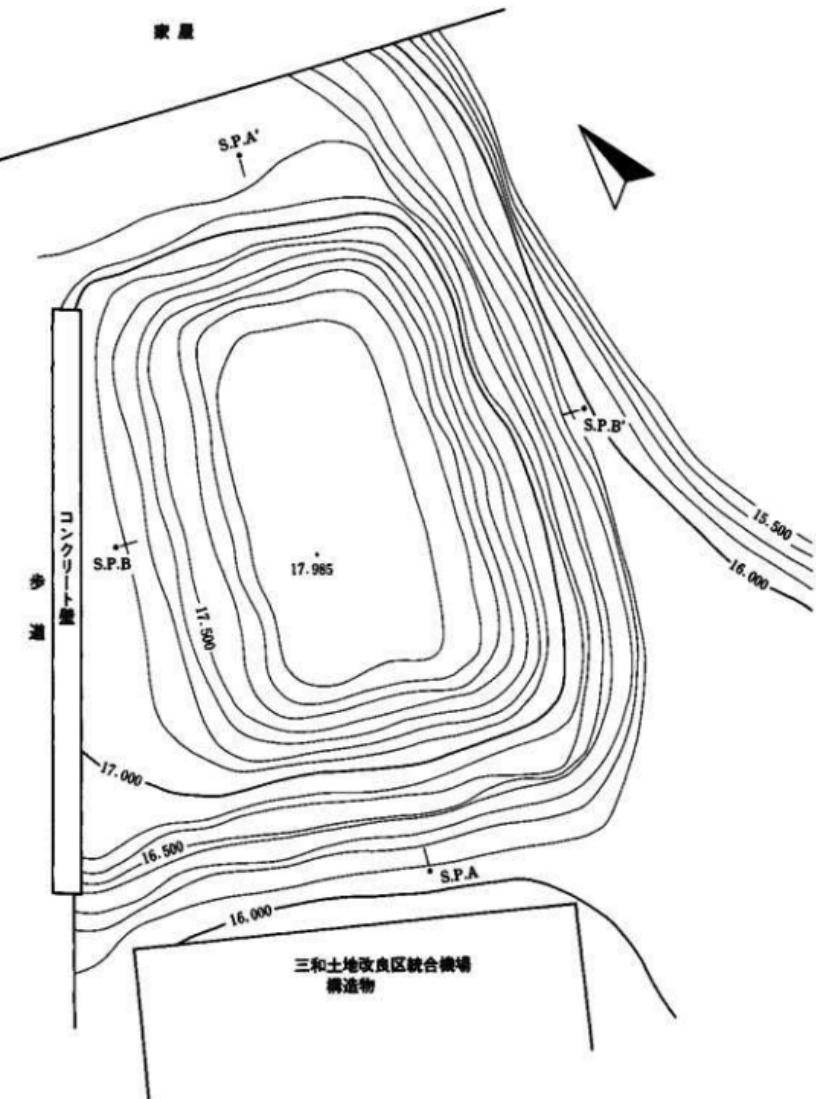
### III 手古宮塚 B

1 漢字

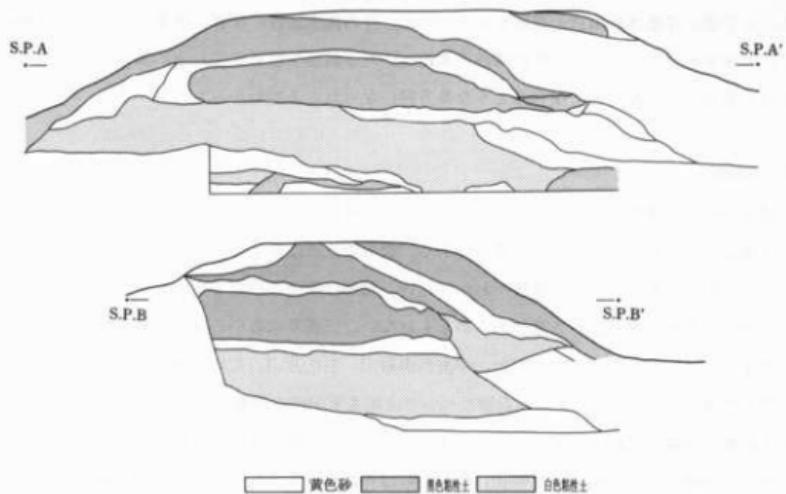
手古宮塚Bは手古宮塚Aとは国道297号線を挟んで反対側に位置し、南西側は揚水施設、北東側は家屋となっている。塚の調査前の状況は軸を南北から東に25度傾け、裾の長軸12m、短軸7.5mの長方形を呈し、頂上も長軸6m、短軸3mの台形状をしていた。国道の歩道の際からは三段築成を示しているが、その裏側や側面は段が認められない。頂上の平場に石碑が8基国道側に向いて並んでいたが、調査時には片付けられていた。

調査開始直後に、昭和40年代に南西の揚水施設のあたりから移築されたことを地元の人々に教示をうけ、トレンチを入れたところ、盛土は粘性のほとんどない川砂と黒灰色粘性土が互層になっており、機械力をもって造成されたものであることがわかった。しかし、揚水施設側や道路側には旧塚の裾が検出される可能性が考えられたので、その部分について先行して人力により掘り下げたが特に何も見つかなかったので、バックホウを投入して盛土を掘り下げた。その結果、旧表土面も検出されず、また調査前に事業者から指摘のあった墓地跡も調査区内に限っては検出されなかった。

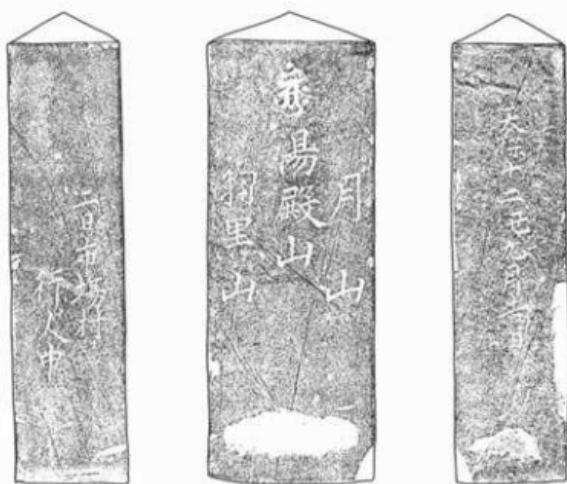
第2表 手古宮塚B 石碑一覽表



第6図 手古吉壠B 現況実測図 (1/100)



第7図 手古宮塚B 土層断面図 (1/100)



第8図 手古宮塚B 石碑拓本実測図 (1/8)

もともとは、手古宮塚Aに隣接していた（現在の国道297号線の下）この塚は昭和時代の初めに土字橋が建築され国道が進路を変えたため、今の揚水施設の位置に移築されたが、昭和40年代に揚水施設がつくられた際に隣接の水田にいたる斜面を埋め立てた上に築成され、さらに歩道の改良により削られて現在のような長方形になったことがわかった。

## 2 遺物

盛土の中から遺物はさほど見つからなかった。石碑については第2表に示した。最も古いのは元暦12年、宝曆12年と刻まれた墓石である。戒名の上には梵字の「ア」が刻されていた。年号の差が63年であり、供養の性格がわからない。現在は国道とへだてられているが、かつて、塚の周辺も墓地であり、行人墓であるかもしれない。二番目に古いのは天保12年のもので同じく梵字の「アーク」と三山名を刻む。中央に湯殿山、右に月山、左に羽黒山を配し、江戸時代の最も普遍的な形式である。この石碑については拓本実測図を掲載した。明治10年の石碑には、神仏分離の影響で三山名の下に神社と刻まる。また、羽黒山は出羽神社と改められている。各地で記念碑の造立の相次いだ昭和15年のものは当地にはみあたらなかった。戦後も、近年まで何度か参詣しており盛況のようである。

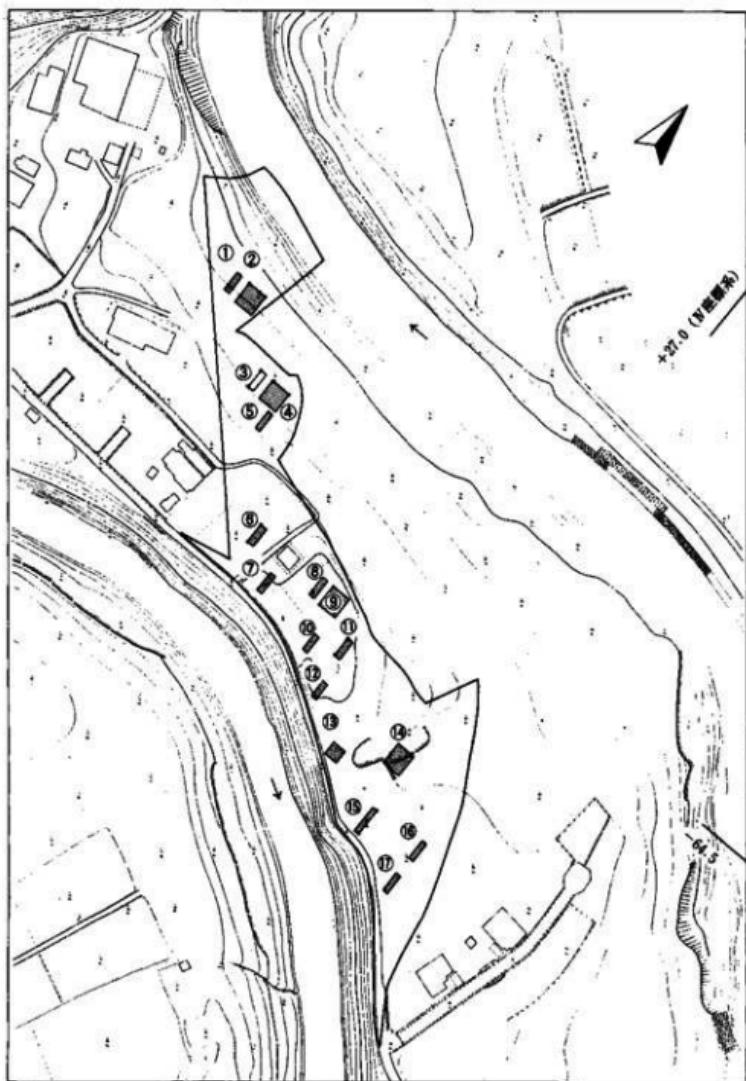
## N 上原遺跡

### 1 遺構と遺物

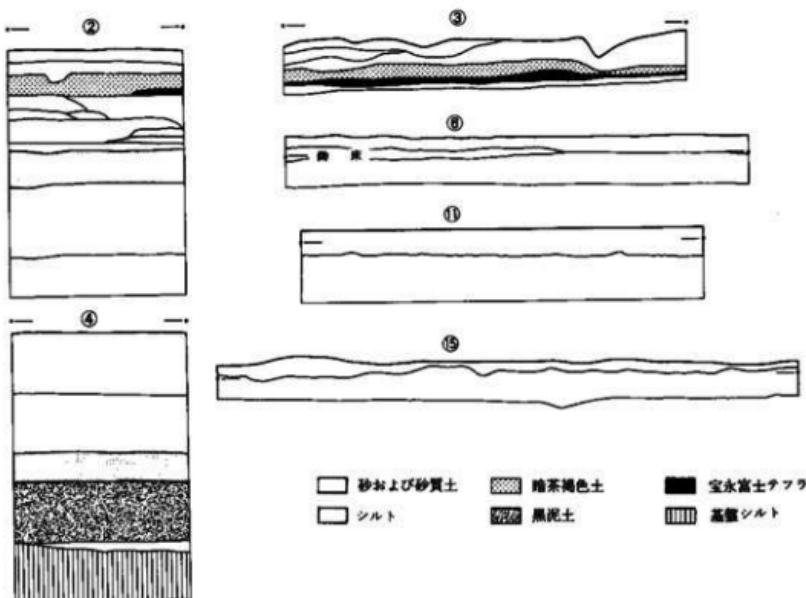
確認調査トレンチは、全体的な傾向を把握するために遺跡全体にわたって設定した。遺構は見つからず、遺物も非常に少なく、畠の耕作土、比較的新しいと思われる堆積土、撒入土であった。第1から第5トレンチは遺跡北側の蛇行洲から滑走斜面にいたる一段下がったところに設定した。第1トレンチは遺構、遺物を検出しなかった。第2トレンチも同様であるが、2枚の砂層の下に暗茶褐色土が20cmほど堆積し、その下から宝永富士テフラを含む層が検出された。その下には砂、シルトを互層に含む層が厚く堆積していた。次の第3トレンチと同様であるが、



第9図 上原遺跡周辺地形図 (1/10,000)



第10図 上原遺跡確認トレンチ配置図 (1/2,000)



第11図 上原遺跡 土層断面図 (1/100)

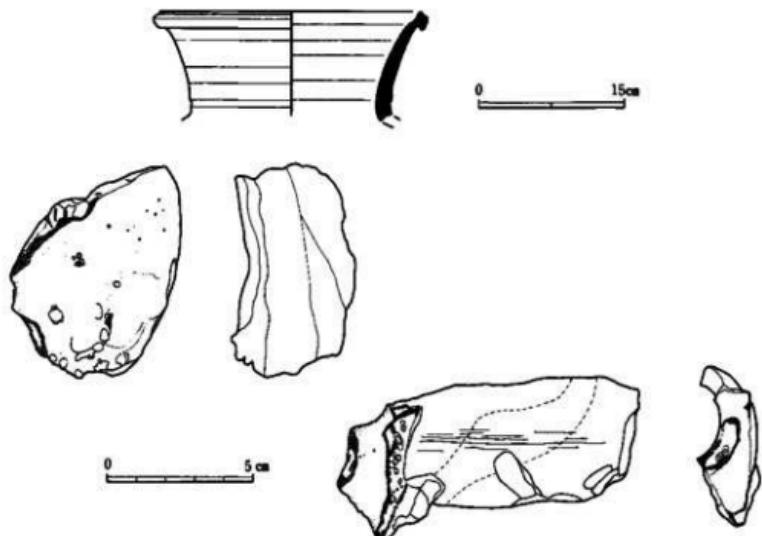
土層から、江戸時代中期以降畑作で大切に使用され発達したと考えられる有機質を多く含む暗褐色土がみられたが、その上に関東大震災によると思われる砂が厚く堆積し、震災以降土地の利用が放棄されていることがわかった。第3トレンチでは羽口、火鉢、ホウロク、陶磁器片、古錢を検出したが、いずれも富士テフラより上のレベルで検出されている。第4トレンチでは、砂やシルトの堆積の下に、黒泥土が厚く堆積していたが、分層はできず、水田等の存在は認められなかった。これらの下に非常に硬く締った青灰色シルトが検出され、洪積層の最上面と考えられた。第5トレンチでは陶磁器片を検出したが近世以降のものであった。第6トレンチでは水田として一時的に使用されたと思われる暗褐色砂質土と鉢床の締りのある暗褐色土の堆積を観察したが遺物は見られなかった。昭和時代に入ってからいくどかの出水により煙の土が流出したので水田に使用されるようになったため、第6トレンチ周辺に造構は存在しないものと思われた。第7～第12トレンチでは畑作土の中から遺物を検出したが、上から約50cmほどにとどまった。流入または土の搬入によるものと思われた。第7、10、11、12トレンチでは土師器片が出土したが煙の土の搬入によるものと思われた。下層の堆積については耕作物の関係で掘削しなかったので不明である。第13～16トレンチは近年の出水で水の流れが激しく土も多く流出している。遺物は埋め戻し等のために搬入されたところに限り見つかったが、いずれも新

しい陶器片であった。第14トレンチについては擾乱坑を利用して深く掘り下げたところ砂とシルトの互層の下に黒泥土の堆積を見たが第4トレンチのように洪積層には達しなかった。

複雑な地形とたびかさなる氾濫により、土の層は均等ではなかった。例えば第3トレンチでみられた江戸時代中期以降の暗褐色土は、第4トレンチでは削り取られて認められなかつた。こういったことを考慮して基本的な土層を復元すると、最も深いところに洪積層と思われる青灰色のシルトがあり、その上にやや荒い砂が薄く堆積し、さらにその上に一部には黒泥土が厚く堆積している。その上に砂やシルトが互層に厚く堆積している。北側ではこれらの上面が削られた上に江戸時代以降の土が堆積し、南側では現在まで削られ続けているため、その上面は擾乱されていた。

地形形成については後述するが、土層について注意を要するのは宝永富士テフラと下層にみられる黒泥土である。宝永富士テフラは唯一時代を指標するものであるし、黒泥土は粒子が細かい上に配水不良による有機質を含み、これが堆積した時期は河川から若干遠ざかって、どちらかというと後背湿地のようになっていたと考えられ、蛇行に翻弄された上原遺跡の長い歴史のなかで非常に特異な環境を示しているからである。

遺物については若干興味のあるものを得たが、前述の通り位置をとどめぬものばかりであった。羽口片は古いものと思われるが、撒入土と考えられる畑作土から検出されたため、周辺に該期の遺構があることを示唆するにとどめたい。



第12図 上原遺跡出土遺物実測図

## V まとめ

### 1 手古宮塚周辺の景観のうつりかわり

古来、養老川は谷底平野内を蛇行しており、この地でも手古宮塚Bの南側で大きく東に流れを変え二日市場の集落を取り囲むように流れていた。江戸時代の宝永年間に悪水路を利用して現在のような直線の流路に付け替えられたことが知られている。こうした水との戦いの一端は手古宮塚のある小字名の次の上（欠端といふのは決闘した堤防のこと）というところからもうかがい知ることができる。

手古宮塚Aの築成年は、発掘調査の土層断面観察では旧堤防が造成されてすぐその上に築成されたように見受けられた。しかし、石碑の最も古いものは享和3年のもので、室永年間からさらに下り、90年以上の差がある。石碑が紛失したり、塚の上に石碑を立てなかつた期間が長かったのかもしれないが、ここは築成の時期を享和年間以降とするのが妥当と考えられる。また、旧堤防と塚の盛土の間に旧表土のようなものが認められないのは築成前に堤防の表土を削り入りに清掃したということかもしれない。

手古宮塚Bの宝曆12年の墓石は行人墓であるかもしれないが、その後のたびかさなる移築のためか、墓石はこの一点だけしか見当たらない。三山塔として最も古いのは天保年間のものであるので元の塚の築成はこの時期と考えたい。墓地としての性格が古く、後で出羽三山信仰の塚が築成されたと考えられる。二つの塚は調査前に考えたのとは異なり川廻しとは関係なく、江戸時代後期に川辺の墓地の周辺に作られたと思われる。

この塚の眼下には明治時代から昭和時代にかけて藤原式揚水車が設置され（現在も堰堤の枕跡が流れに洗われている）、付近の水田を潤して大変涼しげな風景だったということである。養老川の水運も大正時代の終わりまで営まれ、揚水の少ない季節に堰の板をはずして舟やいかだが往来していたということである。

当初地ぶくれのようではとんど壊れていると思われた手古宮塚Aは堤防の中に埋没したものであって、発掘調査によって当時の形を復元することができたが、信仰の対象としての塚のあり方をみると、富士浅間信仰が、この地域では昭和時代の初めにはすたれてしまったということが裏付けられた。一方、立派な三段築成を見せていた手古宮塚Bは、移築が譲り返されていて発掘調査で得られたものは乏しかったものの、出羽三山信仰は現在でも続けられており、たびたび場所を変えながらも代々人々に見守られてきたということであろう。

### 2 上原遺跡周辺の地形について

牛久から奉免に向かって北東に進んだ養老川は曲流して佐是を目指して南西に向かう。佐是

の自然堤防にぶつかって北に進路を変え、妙香地区の台地にぶつかって西に向かい上原の微高地を削りながら東に向かう。小支谷と馬場の台地区を削りながら流れを西に変え上原遺跡の北側をかすめている。

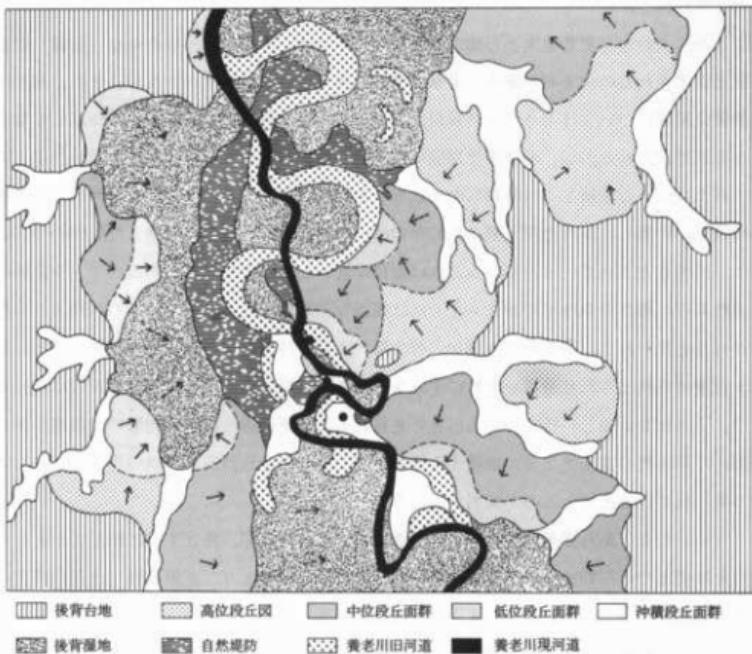
上原遺跡周辺の蛇行は、一般的な蛇行の形態を示しながらも、よく観察すると周辺の地形を反映する複雑な形態をもっている。これは、谷底平野の沖積地を自由蛇行するとはいえ、平野が非常に狭隘なため、下方や側方から強い洪積層に支配されているためである。蛇行が谷底平野の幅一杯まで広がり、谷端の河床に洪積層が露呈しあらわしているのが観察される。一方遺跡周辺は、東側から入る雨谷が急傾斜をもって沖積層の下に潜っていることや谷の中心に想定されることから、河床が洪積層には達していないため周辺の河床の硬軟の差が生じている。

そのため河川の下刻に差ができ、遷移点が出現する直前であるため、不安定な状態である。関東大震災では、遺跡の北東の浅間山が崩落して川が埋まり短絡する可能性があった。また、それ以降南側の攻撃面は約70年のうちに10mほど後退してしまっている。平成元年7月の出水のときには遺跡内を流れた跡が大穴になって残っている。

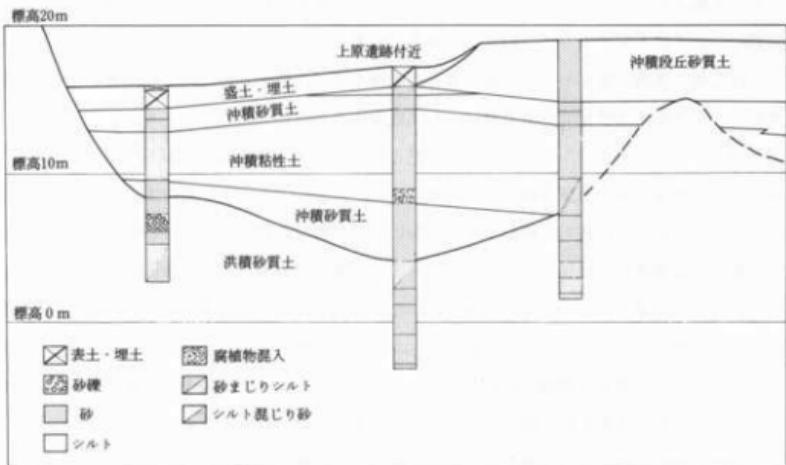
遺跡を中心に観察すると、上原遺跡は蛇行の頭状部から袂状部に移行したところに位置し、北から北東にかけては、浅間山（標高87.2m）を頂点とする馬場の台が川の向こうに迫っている。東は砂の袂状部が少しずつ高度を下げながら広い蛇行洲（15.0mから18.2m）を形成し滑走斜面（11.0mから15.0m）に続いているが、川の向こうは攻撃を受け、馬場の台が大きく削り取られて、異様な断崖をみせている。この攻撃面のほぼ頂点には雨谷から谷津田と化した小谷が入っている。南は上流の蛇行の攻撃斜面になっており、運ばれた堆積物により帯状に高くなっている。河川河床との比高差が大きい。これが前述したように現在も後退し続けている。

この部分は標高19.1mから20.2mを測り最も高くなっている。川の向こうはやや低くなっている（17.5mから18.2m）袂状部となっているが妙香地区の台地に近づくにつれて高度を増し、不明瞭ではあるが、冲積段丘を形成している。東は上原の集落のある微高地に向かってなだらかに上がっているが、春日神社のあるところは標高32mを測り、洪積層の生き残りと思われる。さらに東は南岩崎、根本から馬立や二日市場にいたる自然堤防状の微高地につながり、上高根の水田（後背湿地）と隔てられている。

これらの地形を形成過程からみると、先述した馬場の台や妙香地区の台地あるいは、南岩崎の集落のある高位から中位の段丘面は古く、後期更新世に養老川によって刻まれた河成段丘面群である。段丘はさらに低位に発達したが、繩文海道により急激に海面が上昇し、河川勾配が減少し、下流域から堆積優位になり急激に埋没したことが知られている。その後現在までにいたるゆるやかな海退によってふたたび下刻に転じ、台地と沖積地の境にみられるより低位の段丘や、遺跡南側にみられるような冲積段丘を形成した。これらは非対性段丘状であり、蛇行の側刻によるものと思われる。ほぼ現在のような蛇行路になった後、前述の複雑な地形を作った



第13図 上原遺跡周辺地形形成概念図



第14図 上原遺跡周辺ボーリング成果図

ものと思われる。

以上のことから、更新世末から縄文海進前については、上原遺跡が谷の中心（谷線）に近い位置と仮定されるので下刻が進み、遺構、遺物が残っている可能性が少ない。また、海進中の堆積優位期間についてはボーリング資料などから洪積層に刻まれた谷床から10m以上も堆積したことが想定されるので、堆積優位期間に恒常的な遺構の存在は希薄であると思われる。前項で述べた黒泥土の堆積もこの時期に含まれる。その後はどうであろうか。東京湾周辺の沖積地で埋没が一段落し、ふたたび下刻に転じたのは一般に海進から海退に転換した4,000～5,000年前に一致するとされている。しかしこれは海岸に近いところのデータであるので、中流域の上原遺跡周辺に再び下刻作用がおよぶまでには相当な時間差があるはずで、この時期よりもかなり遅れたと思われる。縄文時代後期か、弥生時代中期に沖積段丘の最も高位な面に営まれた山田大宮遺跡で検出された遺構を参考にするなら、より下位に位置する上原遺跡周辺は幾段か下って、より新しい面しか残っていないと考えられる。上原遺跡では無遺物層の沖積層が削られた面に江戸時代の富士テフラが堆積する層を確認したのでそれ以前の遺構の存在についてもやはり失われていると考えるのが妥当であろう。

こういったことから更新世から続く下刻優位期、堆積優位期、再び下刻に転じてから江戸時代宝永年間までの三期について遺構の存在が認めにくい。つまり、上原遺跡では江戸時代中期以前の遺構については失われてしまったと考えられる。

それでは一般的に谷底平野の沖積地には遺構がないのかというとそうではない。再び下刻に転じた時期をかりに縄文時代後期としたら、下刻のおよばなかったところや高位の沖積段丘面は早くに離水し、それ以降の生活の跡を残していると考えられるからである。残念ながらその時期については不明であり、このたびの調査でも明らかにすることはできなかった。また、残った段丘面も後背台地から土砂供給が進めば埋没するが、雨水や耕作による侵食が進めば流出するという不安定な状況であり遺跡はつねに危機にさらされているといえる。

河川というと、水害や川の向こうとの断絶というマイナスの要因でみがちである。本報告もおおむねその視点から上原遺跡について報告した。しかし、人々は一年中水と戦っていたわけでもないし、あるいは激しい浸食や堆積におびえて氾濫原を放棄していたわけでなく、例えば上原周辺でも養老川に浮橋を架け、冬の薪や春の山菜を川の向こうの妙香山に採りに行くなど川を媒介として現在以上に各地と有機的につながっていたことを見逃すわけにはいかない。確かに水田や畠あるいは定住といった観点からみれば一過性のものとはいえ河川の周辺はマイナス要因が大きい不安定な環境といわねばならない。しかしそれらの観念から離れてみれば、蛇行する川のたもとは洪水期を除けば、特に冬から春にかけての恵みは大きかったものと思われる。今後周辺の調査が進み、養老川の谷底平野の人々の暮らしが明らかにされることが期待される。

# 写 真 図 版



手古宮塚遠景（南西から）



手古宮塚A全景（南から）



手古宮塚A石碑



手古宮塚A石配列状況  
(中心～Aの一部)



手古宮塚A土層断面  
(中心～Aの一部)



手古宮塚A下層土層断面  
(B～中心の一部)



手古宮塚B全景  
(南から)



手古宮塚B石碑



手古宮塚B土層断面

上原遺跡遠景  
(南東から)



上原遺跡第 6 トレンチ  
土層断面



上原遺跡第 3 トレンチ  
土層断面



上原遺跡第2トレンチ土層断面

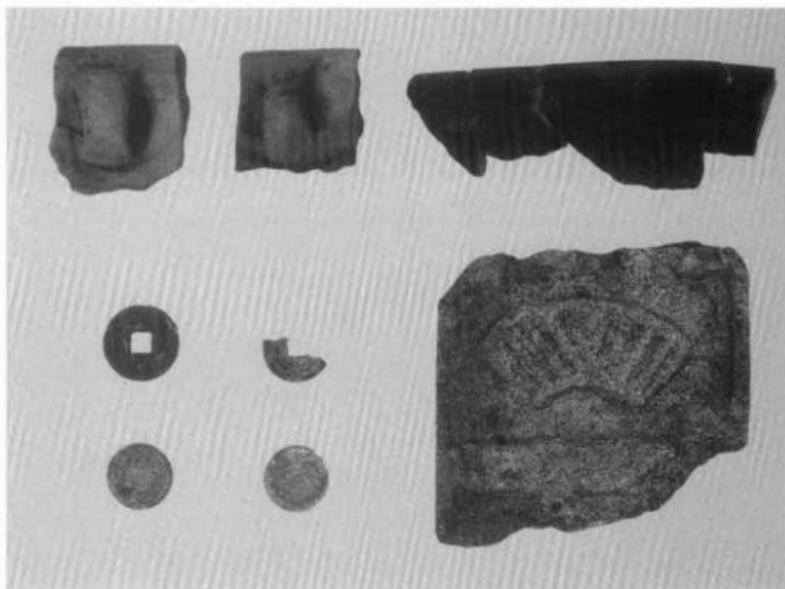


手古宮塚眼下 藤原式揚  
水車環跡（土字橋）

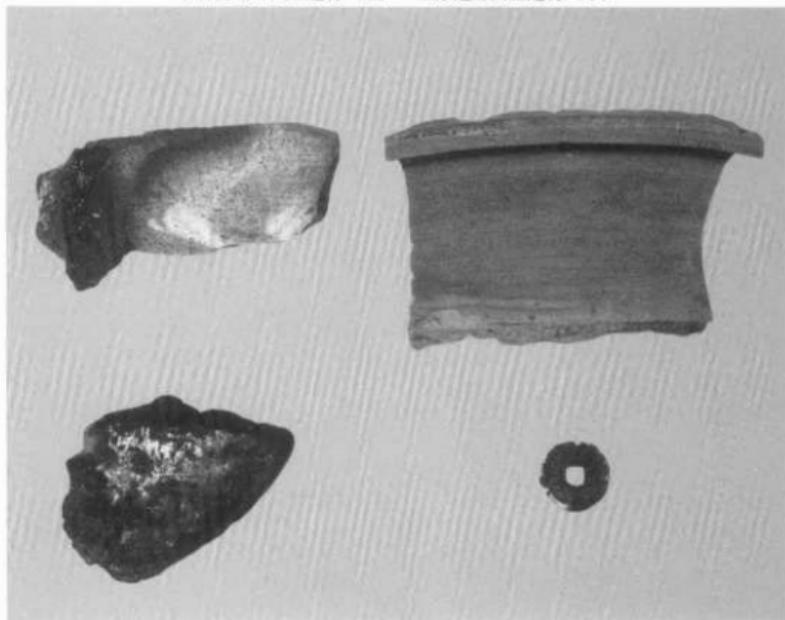


市原市浅間山崩落状況





手古宮塚A出土遺物（上）・上原遺跡出土遺物（下）



抄録

フリガナ	テヨミヤヅカ・ウエハライセキ
書名	手古宮塚・上原遺跡
副書名	(二) 養老川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財報告書
巻次	I
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	234集
編著者名	福田 誠
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2
印刷所	ワタナベ印刷株式会社(千葉県木更津市潮見4-14-4)
印刷年月日	1993年3月25日
発行年月日	1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
手古宮塚	市原市二日市場	219	060	35°26'21"140°7'18"		1991101-19911224	325m <sup>2</sup>	河川改修
上原遺跡	市原市上原	219	061	35°25'7"140°7'51"		19911204-19911224	7,060m <sup>2</sup>	河川改修

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手古宮塚	塚	近世	塚2基	石製品・古鏡 陶磁器片・素焼き器片	養老川中流域の富士山、出羽三山信仰の察
上原遺跡	包蔵地	古墳 奈良平安 近世	なし なし なし	土製品・土師器片 土師器・須恵器片 陶磁器片・素焼き器片 古鏡	養老川中流域の谷底平野の形成

千葉県文化財センター調査報告第234集

**手古宮塚・上原遺跡**

- (二) 養老川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財報告書 -

---

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部

千葉市中央区市場町1番1号

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 ワタナベ印刷株式会社

木更津市潮見4-14-4

---